

毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）



和清山香 兼編編 人行發
會所 所行發
所 所刷印

蠶絲業者の奮起を望む

福井 黒岩 覺

晴い裏日本濕氣の多い陰鬱な北陸も本年は珍らしく朗かな好天氣続きで氣持が好い。一ヶ月餘に亘り縣下機業家二千餘戸を訪ねて見た。蠶絲王國信州の製絲家には閉鎖するものがあると云ふに福井の機業家は何處に行つても實に素晴らしい景氣で家を新築する者改築する者或は工場を増築する者等主人の顔は喜色満面たるものがある。

數年來打續く蠶絲業界不振の爲め製絲家の打撃甚大で工場閉鎖、工資不拂問題等を惹起したのを各地に見受けた事は實に悲惨なる状態である。蠶絲王國長野縣の打撃は殊更らと思はれる。之に引替へ織物王國福井縣は全く反對に木の香復しい新機織工場が各地に續出し爲に女工拂底し富山新潟長野等の製絲女工が陸續として乗込み其の數無慮數千に上つて居る。

内地機業は此處數年間素晴らしい發展振りを示し、殊に昨年來の進展は跳躍的で何處迄伸展するか逆睹し難いものがある。今機業王國福井縣下に觀るに左表の如くである。

年次	戸數	機臺數	職工數
大正五年	一、三三〇	一、〇〇〇	一〇、〇〇〇
昭和元年	一、四四〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇
五年	一、四六〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇
七年	一、五二〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇
八年	一、五八〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇
九年	一、六四〇	一、一〇〇	一〇、〇〇〇

製絲が不振であるが爲に住馴れた蠶絲王國に暇乞をし織物王國へと志す。昨日迄生絲織物に従事して居つた女工が今日は人絹織物に従事すると云ふ全く皮肉な現象を見せつけられる時轉々感慨無量のものがある。信州の製絲家が此の女工を引戻す勇氣が無いのであるかと叫びたくなる。往年製絲家が華かであつた當時女工募集に血眼になり一人當り募集費數十圓も費消した事を懐古する時何んと云へぬ感に打たれる。今福井縣機業家が其の味を味はつて居るのだ。

織物は幾らでも賣れる。福井の五月中の生産高は勿論人絹織物は遂に新レコードの百万反、輸出絹織物が約二十三万反、之に内地絹織物を加ふれば優に百四十万反は下るまいと思はれる。斯くの如く織物は幾らでも賣れるのに何故其の原料である生絲が否製絲が振らないのだ。生絲が高過ぎる爲か？ 生絲の眞價を衆人が知らぬ爲か？ 眞價を知らなかつたら大いに知らしむべく宣傳する必要がある。高過ぎるなら安い値頃にすればよいのである。人絹絲から見ると現在の生絲は全く宣傳が無い。又製造工程に於ても無駄な處が多々ある様に思はれる。此の際蠶製絲に一大改革を加へ生産費を切詰る事が何より肝要と思ふ。

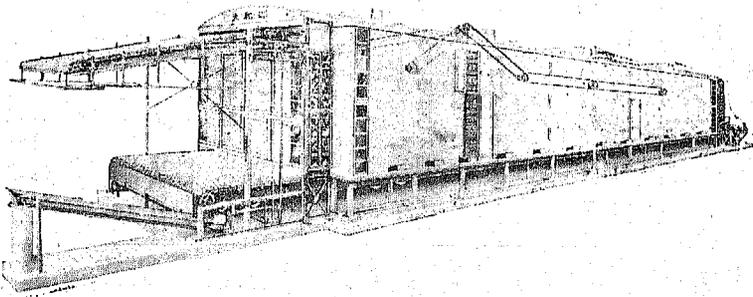
山本三六郎著
化學純絹絲の工業的完成
伊太利蠶絲絹業の衰退原因と其の改良
蠶絲業法規要論
書原勇治著
蠶絲業法規要論
市田上縣長野
會究研學科絲蠶 所行發
〔振替長野6413番〕

螢窓漫筆

名古屋 草野 史郎

題して螢窓漫筆といふ。此の一文を千枚子及其の他長友に贈る。

現代乾繭機界ノ王座 大和式自動輸送乾繭機



一九三四年代表型

【型錄贈呈】

製作發賣元
株式會社
大和三光商會
東京京橋區京橋三丁目二番地
電話京橋(56)五三二〇番

營業課目
特許大和式自動輸送乾燥機
特許三光式自動輸送機
特許やまほ式自動輸送機
特許大和式熱湯自動還元機
特許水野式改良ロールセーダー
特許アイエム、コールセーダー
特許アイエム、ストーカー

もう早二十年もの昔になる。筆者が福島に千枚子が小半田(宮城縣)に勤めてゐた頃二人はよく往き來して話したものだ。或る日記の事であり深く突込んだ話をした事を今に記憶してゐる。當時の話を今此處に蒸返す意志は更に無い。たゞ日記につき最近特に感じ又來年の記念祭を機會に筆者に於て多少計畫しつゝある事があるので特に此の一文を筆者に送らう。一人でも多くの同感者を得たい爲に。

筆者が小學校に上つた時姉の日記をうけてゐるのを見て自分も書いて見たい氣になり曲りなりに書き始めたのが抑々の事だ。四五年の時先生から日記を書く事を教はり爾來今日に及んでゐる。そして日記帳の型を描へる必要を感じて博文館(時には積善館)の小型に一定してから今年で二十五冊になる。

大抵の人達が『日記はなか／＼續かぬものだ』と云ふけれども筆者には日記を書く事が少しの苦痛でもなく寧ろ書かないのが何だか氣抜けがして物足りなく感ずる。

ところが斯く三十年來毎日の日記を書

きながら最近十年と云ふものは「日記を書き事の意味を」を感じてゐる。一時はやめやうかとも思つたが書く事が別に苦痛でも無いから「他日何かの爲になる事があるかも知れぬ」と云ふ程度の軽い意味で継続して来た。尤も昭和三年に盲腸炎をやつた時病床日記を書いたのが動機となつて其の後は毎年健康日記を別に書いて居るが之は或る意味に於て確かに有意義だと思ふ。

最近四五年間身邊に纏る有形無形の雑草を刈る事に少からず苦悶し努力した筆者は日記を書く事の無意味さを一層痛感して来た。

と云ふのは自分の日記にすらも、自分の生活を正確に、自分の行爲を正直に書く事が出来ないからだ。なぜ正しく又正直に書けないか？それは云ふまでもなく他人に見せたい又見られたいにしても自分だけが見るさへもあまりに醜い生活でありあまりに懶める行爲であるからである。だから日記は筋骨、骨格だけに止まる。従つて筆者は(否多のく人達も)日記に現はれない以外の生活をし行爲をしてゐるのだ。

もう少し考へてみる。

此の日記に書かれない醜悪な生活、煩惱妄念に満ちた行爲は明かに人間生活の一面であり而かも此の一面が最も強く人間を支配してゐる事に気がつく。

してみると記されざる書かれざる日記の生活を考へてこそ初めて修養反省すべきだと云ふ結論も生れて来ると思ふ。

筆者が正式に日記を書き初めた頃「傳記は本人の日記から作り上げる」と云ふ事を先生が教へて呉れた。もし之を眞なりとすれば傳記は筋骨骨格に過ぎない。人間を支配する日記に書かれざる生活の一面は現はれてゐない筈だ。其處で世に發表される傳記や記録や歴史が如何に表面的なデタラメなものであるかを筆者は

想像する。

ところが記されざる日記、書かれざる歴史をばつきり掘んで吾等の眼前に見せて呉れるものがある。小説、劇、映畫等が其れである。かうした藝術は偽らざる人間を表現する所に生命がある。だから多くの人は歴史に興味を持つよりもヨリ多く小説や劇、映畫に興味を持つ。人間の淺ましい生活感情をさらけ出して呉れるからだ。偽りのみに生きてゐる人間が小説や劇や映畫の中では本當の人間らしい生活を味ふことが出来るからである。

かうした意味から日記を書く無意味さを痛感してゐる筆者は其の無意味な日記を今尚續けながら、其の反映對照として最近では其の道の専門家の指導を受けながら「記されざる日記」とも云ふべき小説や劇の脚本や映畫のシナリオを書く事に精通してゐる。書かれざる日記を想ふて醜悪なる生活、煩妄な行爲を味ひながら其れを堪え忍び其れを克服して行く事が人間に課せられた大きなシゴトだと感じて筆者は此の途に公務の寸暇を偷んで勉強してゐる。然しいつになつたらモノになるかを思ふと心細くなる。

之れが來年の記念祭とどんな關係がある？と質す讀者もあるだらう、無理もない話だがその答は暫く待つて貰ひたい。たゞ日記を書いてゐる讀者諸君に筆者の氣持を訴へただけと承知して貰ひたい。同感者があれば第二段の筆を進める事とする。(九、六、一七、稿)

千枚漫語

千葉 高島生

オ世辭ぢやないが、最近時報の面目は一新した。體裁の良否は別として、内容が千曲會の機關紙らしくなつて来た。此

の點編輯者に對し衷心謝辭と謝意を吝しまない。

六月號の編輯餘瀝に、本紙を菊版位の小冊子式のものにしてはと云ふ様な意見を紹介してあつたが、私も大賛成。成るべく來春一月號から斷行されたいものである。

誌上の記事と相俟つて寫眞版を載せる事は非常に親しみを増すものである。經費の事もあらうし、贅澤も言へまいが、精々其の方針を採つて頂きたい。

編輯者の苦心も羨もあつたものぢやない。毎月の時報を帶封も切らずに放つて置く者もあらうし、行先不明のため返戻されるものもある。考へてみれば甚だ都合のない話である。

會費の未納者や記念事業費を離出せざる者等も相當ある事と思ふ。此の前の二十周年記念計劃の時の離出金の始末はどう處理されたか。其の時離出したか？た者に對して今回は何等考慮しないのか。

會計係が會費の整理に拂はれる苦心に就ては全く同情する。ズルイ奴、剛々しい奴は別として、境遇上納入出来ない事情に在る者に對しては、支部長の具申に依つて、免除又は延納を認める事にしてはどうか。

近頃「日本精神」と云ふ事が高調されて居るが、其の定義は知らないけれど、直感で理解出来る。同じ様な意味に於て「千曲精神」を高調したいものである。

大勢相手の事はそう几帳面に行くものでない。と悟つて掛れば別問題だが、兎も角癪に觸ることが多いだらう。此の點點諸公に對して十分の同情を持つ。

六月號手島君の「統計的に觀たる蠶絲業の將來」は面白く讀んだ。時報紙上の論文は此の程度のものがよい。之れ以上専門的學術的のものは「蠶絲學雜誌」に譲る事だ。同君の論文に依つてヒントを與へられ、私も人間問題に就て一言したくなつたが、今は間に合はないから、他日に譲る。

濱君の「石井鶴三先生の面影」もよかつた。コンナ場合、石井氏の寫眞が載れば申分ない。岡部君と平尾君の上原安夫君に關する記事も感激深く讀んだ。

上田便り、母校ニュース、校友會ニュース等すべてよし。叙任辭令の欄に、賜三級俸(和田先生)三級俸下賜(大淵先生)の區別のあつた事に氣付いた者ありや。前者は勲任、後者は奏任の場合の用法である。地方農林技師はあるが、地方農林技師は(本省詰)地方廳の者も等しく農林技師)又本省は「任農林技師」(依願免本官)の例の如く漢文式、待遇官は「地方農林技師=任」(願=依)本職ヲ免ス……の例の如く假名混り文式であることも常識として知つて置くべきである。(新聞雜誌にこの區別なしに使用したものが多から、物議り顔に附言して置く次第)

時報を廣告(轉任の挨拶等)に利用する場合「無料又は極めて廉價」と云ふやうな曖昧の處置は困る。一行イクラと定めて置いたら如何。

今月の漫語は「時報讀後感」になつて了つた。書きたい材料は山程あるが、近頃原稿不足に苦しんで居るらしくもないから、此の位で遠慮して置かう。

失職我觀

篤 之

この一文は千曲時報に掲載さるゝ文章

の種類としては或は妥當でないかも知れない。そんな理由で没書の憂目を見ることを懼れつゝも、自分の體験を披瀝して本會が抱有する比較的多数の就職者のため、前報の戒めとなり以て他山の石たればとの老婆心により起稿す。

私のスタートは餘りにも幸運であり、餘りにも順調であつた。N縣廳の技師に振出しにA縣を経て關西の某縣で技師になつた。そして十五ヶ年経過。昨年秋豫ねて希望した通り退職して恩給に在りつた。それは自分として全く満足そのものであつた。恩給を得て民間に更生し、その得るところの報酬で米鹽の資となし、恩給金として得るところのものは子女の教育資金又は老後の要領とすると言ふやうな計畫を策し、無資産なる自分として金錢の信條としたのであつた。

然るに世の中は失業者の洪水だ。そんな事をしては二進も三進も出来なくなる。と、本當の好意を以て注告して呉れた、某々氏の言葉が適中し、それから十ヶ月を経る今日、全くやりきれなくなつて死線の悲鳴を擧げようとは夢想もしない事だつた。

始めの考へでは蠶絲業界もこう連年不況では見込もあるまい。それに自分として蠶絲業華やかなる可き時代の來るべきを豫想されぬ今日、蠶絲業に携はつて農蠶家を指導奨励する事は全く堪へられない事の様に考へられたので、潔く蠶絲業界に見切りをつけて、軽く轉身したいと言ふ念願のもとに、始めは他の職業に就いて就職口を探した。ところが何れの業も、失職者が充満して無經驗者を入れる隙間は無いのである。さらば第二段に構へたる教職員を志したところ、之れも文檢を得る迄は相當の書籍購入費と日子を要すると同時に、文檢合格即就職と言ふやうな階梯は得られなく、此處にも就職戦術の要ると言ふ事が譯かつた。

そして誰れも、彼れも折角の経験を無視して他の仕事に入る事は無業であると言ふ、意見のみであつた。

それは従來の理想や、意地を捨てた。それは家族の生命保護の任務重しとする責任から出た諦めである。今迄の経歴は云々、どんな低位置にでも甘んずるから、どうか頼むと、諸方に交渉したものが一つとして就職口が無い。冬去り、春來るも相も變らぬ子供相手の月日である。履歴書を書くこと數十通、毎朝新聞の廣告欄に目を通してやつと飯にすると言ふ生活の連続だ。就職方を依頼したききくは本當に一生懸命奔走して下すつた方も多々ある、そうかと思ふと何んのかんと小生の依頼状に對して難辭をつけて來る、退官するときには相談もせず、今となつてそんな話を持ち出されては困る、と言つた様な海に大官氣取りの挨拶もある。そんならばと辭を低うし、その誤りを陳謝して、再び御高配を願ふと、はてさて困つたもんだ。威容の底も見えずいて、自分の力ではどうにもならないのだ、との御託宣である。

こんな人もある。併し概して、吾が友、吾が會友の御懇情は厚いものである事を體驗した。この上どんなに心配して頂いても、無いものは無いのである。現に今日私が徒食して居る事實でも分るのである。

○ 其處で私の到達した結論は思給なんてものは全く中途半端なものだ。之れあるがために就職のさまたげとなり、之れによりて衣食の資とせむか、その額甚だ僅少にて笑止の極みである。しかも四十歳を越えたもの、求職は誠に困難である。種類の技能又は性能ある人は暫く措き再等平々凡々な人間は全く困難なのだ。喜んで迎へて呉れるのは生命保險會社許りである。日本もこう人間が多くては中年者の掃げ口が無くなる一方だ。其

れてやつぱり慣れないながらも、自主獨立と云ふ事をせねばならぬ。其れが失敗するかどうかは別問題としてある。大方の諸君よ。現在の地位を守る事に努力せられよ。今の地位より好い地位が得られる事は非常に稀だ。況んや、失職者としての求職者は世間から敬遠される。蔑視される。現職中に於ける友必ずしも失職者の友でないと言ふ事も留意せねばならぬ。私もこんな境遇に墜入らうとは夢想だにせなかつた事である。失職者の心情を識るのは失職者と其の経験者だけである。(六月廿七日稿)

茨城縣下實業學校 養蠶科教員協議會の模様

去る六月六日及七日茨城縣立鹿島農學校内に於て首題の養蠶科教員協議會が開催せられ、幸ひ余も亦御招きに預り臨席の光榮に浴することが出来たから、其の模様の一端を誌して御参考に供し度いと思ふ。

先づプログラムの概要と出席者氏名を挙げると次の通りである。

- 一、授業參觀(午前十時—午前十一時)
 - 二、實習參觀(午前十一時—午前十二時)
 - 三、批評及協議(午後一時—午後四時)
 - 六月七日(木)
 - 一、協議及懇談(午前九時—午前十二時)
 - 二、講演(午後一時—午後三時)
- 生理學を基調とせる飼育法の理論と實際
- 出席者氏名(○印は母校養蠶科出身者)
- 茨城縣立水戸農學校教諭○原田 種龜
 - 茨城縣立石岡農學校 全○本谷 良雄
 - 茨城縣立江戸崎農學校 全 松岡喜惣治
 - 茨城縣立眞壁農學校 全 古性 忠三
 - 茨城縣立笠間農學校 全 橋本 廣
 - 茨城縣立大子農學校 全 中野 修
 - 茨城縣立結城農學校校長 全 岡崎 勘助
 - 茨城縣立結城農學校校長 全 山田 爲藏
 - 上 教諭○川島熊太郎
 - 上 藤原 武志

茨城縣立取手農學校 全○寺島 雅彦
茨城縣小瀬農學校 全 鈴木 三令
茨城縣谷田部實業學校 全 中村 忠
茨城縣立鹿島農學校校長 全 青柳豊太郎
上 教諭○川島熊太郎

協議 題

- 一、學科教授と養蠶實習との連絡方法如何(石岡農學校提出)
 - 二、養蠶實習と授業との連絡上最も適切な方法如何(鹿島農學校提出)
 - 三、蠶絲業の現況に鑑み養蠶科の學科及び實習教授上改善を要すべき點如何(笠間農學校提出)
 - 四、蠶絲業の現況に鑑み蠶業教育の重點を何處に置くべきか(水戸農學校提出)
 - 五、農學校に於ける農場經營養蠶實習を如何なる程度に課すべきや(水戸農學校提出)
 - 六、教科書統一に關する件(眞壁農學校提出)
 - 七、蠶業の現況に鑑み實習教授上改善を要すべき點如何(結城農學校提出)
- 質疑 題
- 一、養蠶實習上特殊飼育は如何なる程度に加味するが適切なるや承りたりし(石岡農學校提出)
 - 二、各校に於ける特殊飼育の實習狀況承りたりし(水戸農學校提出)
 - 三、各校に於ける桑園實習の方法承りたりし(石岡農學校提出)
 - 四、各校に於ける桑園間作の狀況承りたりし(水戸農學校提出)
 - 五、養蠶實習の狀況承りたりし(笠間農學校提出)
 - 六、養蠶の狀況承りたりし(眞壁農學校提出)
 - 七、蠶業の實習及び實驗の種目(現に實施しつゝあるもの)を各學年別に承りたりし(結城農學校提出)
 - 八、現下の蠶業事情を如何なる程度にて教授するや承りたりし(石岡農學校提出)
 - 九、各校の養蠶科と地方實業界との連絡情況につき承りたりし(結城農學校提出)
 - 十、見本園に栽植すべき品種は幾種位が適當なるや承りたりし(石岡農學校提出)

士、各校に於ける桑園用堆肥材料を如何にして作り居るや承りたりし(鹿島農學校提出)

三、養蠶實習(生徒直等)狀況承りたりし(結城農學校提出)

協議會に於ては鹿島農學校校長青柳豊太郎氏が議長席につき、縣からは地方視學官木戸達夫氏の臨席を仰ぎ、一同熱心に隔意なき意見の交換を行ひ、自分も講師席から時折意見を陳列した。

大名昇君を南米に送る

扇 港 岩 濤 生

六月十八日の夕方蒲生千曲會理事長から一輪の封書が届いた。開いて見たら、大名昇君(蠶一)が南米ブラジルへ移住の爲めリオデジャネーロ丸で十九日貴港を出帆されるから千曲會を代表して御見送りにして呉れと云ふ意味の依頼状であつた。突然で而も少しも此の事を知らなかつた僕には全く疑耳に水で、現に大名君は福島縣の蠶業取締所の福島支所長とばかり思つて居た、事實とすれば此の榮職の身をかなぐり捨て、ブラジルへ移住せらるゝ事になつた譯だが、一體此の壯圖の動機と云ふものは何であらうか、又如何なる目的を抱負を以て此の圖に就かれるのであらうか等と云ふ事は恐らく同窓生中の初めての企であらう事に於て最も知り度い好奇心の一つであつた。然し理事長の書面には何等等の點に付ては書いてもなく知る由もなかつた。何れ大名君の事だから、確固不拔な一大決心と抱負

とを以て此の舉に出られたに相違ないと想像しながら此の知り度い好奇心を押へつゝ明日の面會を待つ事にした。而し歸宅後突然頭に浮んだ事は當地の移住民教養所に或は泊つて居られるかも知れないと云ふ事であつた。夫れて直に電話を掛けて見たが何様千二百六十名と云ふ多數が一ヶ所に宿泊して居ると云ふので仲々大名君が判らない。遂ひ其の夜は致し方なしと諦めて居たが、JORKでは、ブラジル移民の變り種として大名君の名も紹介放送され、又十九日の神戸新聞にも大名君の名が載つて居た。船では非常に混雑して万一使命の御見送りが出来ない事があつては誠に申譯がないと思つて居ても居なくても兎も角移住民教養所へ行つて見やう、開けば居所は判るだらうと思つて出動途中此の教養所を訪ねる事にした。行つて見ると玄關前の廣場には幾千個となき荷物(金銀やバケツ等勝手道具が目につく)が山と積まれて今にも船へ積み出されやうとして居る處であつた。其の荷物の中を這つて玄關受付へ行くと混雑の中にも整理がきちんと付き昨夜の電話と異なり、訪ねる人の室も直に判明して、やれ／＼と胸撫下した。然しいざ面會となると實の處大名君の名は百も承知で良く判つて居るが、どんなお顔か、しつかりと頭に浮び出て來ない。まあ會へば判るだらう位の程度で實は室に這入つて見たのであつた。處が一見此の人に相違ないと云ふ自信のある顔の人は一人も見出されなかつた。それも其の管憶へば二十年前の學生時代以來恐らく一度も會つたことのない吳五の身で、すつかり親爺になりきつて居る境遇だもの一見した位で判る譯がない。其處で大聲一番大名さんと云ふ方はいらつしやいますか、怒鳴つたらすぐ側からはい僕ですとの事で良く／＼見ると成程學生時代の儂は確かにどつかに残つて居る。はあ成程なと思つて直に自己紹介をしたら先方も

第一學期授業終了 各科各學年の第一學期授業は左記月日を以て終了し何れも實習開始となる譯である。

繭 六月廿三日迄
絲 六月廿一日迄
紡 六月廿二日迄
紡 六月廿三日迄
紡 六月廿六日迄
紡 六月廿六日迄
繭二、繭三、及絲三は既報の如く實習中である。

紡織科二三年生懇談會 六月二十日午後三時から第十三教室で紡織科二三年生の懇談會を開き職員より校外實習に就て種々注意する處があつた。

校外實習生に對し學校長の訓示 夏期校外實習に出發せんとする蠶二に對し六月二十六日午前十時より紡二、紡三に對し同日午後一時より第八教室に於て學校長、井上教務課長、金子生徒主事より訓示する處があつた。

春蠶實習終了 養蠶科二年及三年の春蠶實習は六月二十日好成績を以て終了した。本年は雨量が少なかつた爲め春蠶用桑の收量少く三割内外の減收となつた。

蠶一の有明天柞蠶飼育林其他見學 養蠶科一年生は宮坂講師、池内副手に引率され六月廿五日より三日間に渡り長野、松本方面を見學したが視察箇所は左の如くである。

長野 農事試験場、蠶業試験場、放送局、測候所
松本 有明天柞蠶飼育林、蠶業取締所、蠶業試験場、工業試験場、農林省蠶業試験場、普及團

夏季養蠶實習開始 製絲科一年は七月一日より宮坂講師柞木副手塚本副手指導の下に夏蠶實習を開始した。又養蠶科三年は卒業製作の爲め各實驗室に分屬して實驗を開始した。

製絲科二年生校外實習 製絲科二年生三十名は六月廿五日に夫々工場に入場したが、實習期間は例年の如く四週間である。實習工場名は本紙の末尾に記載してある。

校外實習生出發 養蠶科二年の校外實習生廿八名は例年の如く七月初旬から八月初旬の間に出發する豫定である。實習期間は廿五日間である。本紙末尾に實習場所名及實習開始月日を記して置いた。

蒲生教授内地研究 蒲生教授は今度文部省内地研究員に選拔され東京帝國大學農學部に於て約三ヶ月の豫定にて蠶體生理及解剖學に就き研究せられる事になり六月二十六日上京せられた。

細川豊氏講師となる 井上教授研究室に副手として勤務せられた同氏(蠶十九)は今回三輪貞徳氏の後任として六月六日附にて講師を囑託された。

市原文男、太田三郎兩氏新任 本年製絲科を卒業せられた兩氏は六月十一日附にて副手を命ぜられ製絲科に勤務せられる事となつた。

重なる來校者 東京高等蠶絲學校教授尾崎準一氏外生徒二十二名(六月十一日)高松高等商業學校校長澤田源平氏(六月十一日)印度マインツル洲蠶業試験場技師ラマナツト氏(六月十二日)長野縣知事岡田周造氏(六月十五日)京都市染織試験場々長猪飼壽氏(六月廿五日)東京文理科大學々長森岡常藏氏(七月二日)

校友會記事

山岳部特別委員更迭 六川忠一郎氏辭任に付き六月十九日後任として小林尙一氏が任命された。

本會記事

支會長更迭 鹿兒島千曲會會長左記の通り更迭せり。
新任 木脇寅熊
退任 松野正一
本會日誌
六月十四日 故加藤徳四郎氏(絲一)遺族へ有志弔慰金參拾五圓也贈呈せり。
六月十六日 大名昇氏(蠶一)南米伯國へ渡航せらるゝに付沖支會長へ見送方依頼せり。
六月十八日 金澤文也氏(蠶選十二)逝去せらる。御遺族に對し弔意を表し併て

國寶古塔めぐり

上田市郊外の名建築

「古建築界の西蔵」と言はるゝ上田市郊外には、特別保護建築物として、指定された古建築物が多数あるが、就中大法寺の三重塔、國分寺の三重塔、前山寺の三重塔及安樂寺の八角四重塔は最も著名なものである。
一、大法寺の三重塔
小縣郡浦里村にある。當社線當郷停留場下車三町。大法寺の塔は、普通見返塔と稱す。明治三十年四月に特別保護建築物に指定された。寺傳に平城天皇の勅許を得て、大同元年坂上田村麿將軍の歸依建立に係るものと云ふ。其後の沿革不詳、正徳二年、寛政六年、上田城主松平伊賀守へ出願し、領中勘化を以て修理し今日に至つた。大正九年修理の際には、第二層額斗裏面より正徳二年正月二十六日造營の銘文を發見したと言ふ。建築物の形式、手法等能く之に合致するを以て見れば、同時代の再建に係るものだらうとの事である。中に安置さるゝ十一面觀音菩薩は、身長五尺八寸、國寶である。

二、國分寺の三重塔
小縣郡浦里村にある。明治四十年八月特別保護建築物に指定された。寺傳に天平の古塔朽損して、久しく荒廢してゐたが、建久年間に源頼朝が之を修造したと云ふ。然るが其後又、長年月の経過により、建築物が朽壞したので、昭和七年三月之が再修築に着手し、同八年七月漸く其完成を見、現在の建築物がそれである。塔の様式、構造、手法等は一切從來のものと同様らしいものである。

三、前山寺の三重塔
小縣郡西鹽田村にある。當社線中鹽田驛又は中野驛下車約半里、中鹽田から別に乗合自動車の便もある。大正十一年四月十三日特別保護建築物に指定された。其構造は三間三層塔姿、屋根柿葺である。目下は建築物損傷の爲め修理中であるが、遠からず完成の見込である。
附近の中禪寺御堂は、最近に發見された國寶的建築物である。寺の本尊藥師如來は、既に藤原時代の優秀な寄木細工の佛像として國寶に指定されてゐるが、堂は七百五十年乃至八百年前建造

に係るもので、之は平泉中尊寺の金色堂、平町(福島)の白水阿彌陀堂にも比すべき重要なものである。
四、安樂寺の八角五層塔
小縣郡別所村にある。當社線別所温泉驛下車約五町、塔は明治三十一年十二月二十八日特別保護建築物に指定された。寺傳に安和二年維茂信濃守に任ぜられた時、國家鎮護の爲め招勅を奉じ、金光明最勝王經を納め、此塔を創建したといふ。壽永年間、源義仲が平氏追討の際に兵火に罹り、寺院悉く灰燼に歸したるも、此塔のみが災を免れて今日に至つたと云ふ。正和三年、文祿三年、承應三年、貞享元年、享保八年、寛延四年、明和元年、享和元年、文政十一年、文久元年に何れも修理あり。最近又之が改築をなした。本塔は室町時代の唐様としては、江州芦浦の觀音堂、嚴島五重塔と共に、我國の著名なるものである。

塔附近の御堂には、樞谷及幼牛二師の木像がある。幼牛は支那の人、樞谷惟仙の支那に遊ぶ幼牛恵仁が、之に就いて學ぶ。樞谷の歸朝に際し、之に従つて來たり日本に歸化し、安樂寺第二世となつた。嘉曆四年に幼牛自ら樞谷並に自像を刻し胎中に陀羅尼經と紀年とを書いてある。共に國寶である。附近には又、北山山觀音堂があり、觀音別當の淨樂寺裏に、千手觀音出現の遺跡と傳へらるゝ場所に有名な多寶塔がある。之は大正十五年一月長野縣の史蹟として指定されてゐるが、今回文部省に於て、重要美術審査委員會の決議により近く、國寶編入さるゝことになつた。

五、法住寺虚空藏堂
小縣郡東内村にある。當社線西九子驛下車、それより乗合自動車で約三分、靈泉寺温泉に近い。
塔では無いが大正十一年四月十三日特別保護建築物に指定されてゐる。其構造は、桁行三間、梁間四間、單層、屋根入母屋造、銅板葺である。昨年改築されて、面目を一新した。寺傳によれば、貞觀三年圓仁創むるところにして、日本七處の虚空藏堂中、第五番に當るといふ。

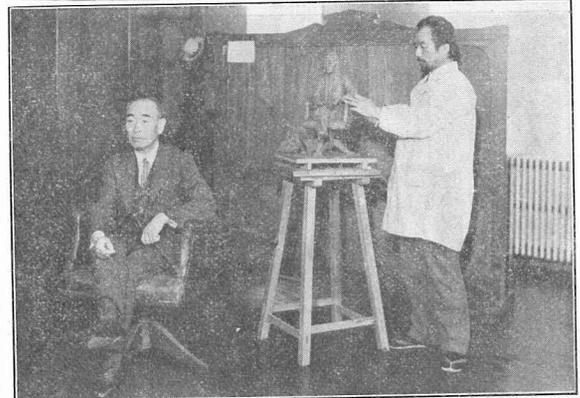
叙任辭令

昭和九年六月一日
全 教 授 清水 俊 興 孝
内閣 蒲生 俊 興 孝
陸軍高等官四等

昭和九年六月二日 大木 定 雄
顯二依り副手ヲ免ス
昭和九年六月六日 手 網 川 豊
兼講師ヲ囑託ス
昭和九年六月八日 須 藤 尙 雄
公立實業學校教諭 佐藤 尙 雄
昭和九年四月二十八日ヨリ年功加俸年額金百九十二圓下賜
昭和九年六月十一日 臨時副手
副手ヲ命ス 須 藤 尙 雄
昭和九年六月十五日 學校 太 田 三 郎
從六位 教授 清水 俊 興 孝
從六位 教授 蒲生 俊 興 孝
叙正六位 宮内省

二十五周年記念事業報告

壽 像 其 後
既報の通り、石井先生は愈々校長壽像製作のため六月五日來田された。母校では月例の晝餐會に於て教職員に林委員長が御紹介申し上げた。其の時石井先生は「既に來校後四五日になるが氣分が非常に良く、此分では心ゆくばかりの作品



が出来そうだ。誠心誠意製作に従事する」と云ふ御挨拶があつた。爾來御歸京の日迄の二十四日間此の氣分は先生の藝術的衝動に一貫して流れて居たことは正に疑

ひ無く其の熱意と努力には實に涙ぐましいものがあつた。かくて等身大の胸像一箇と椅子に倚り筆と巻紙とを手にされた三尺大の座像一箇計二箇が出来上つた。其の出来栄は不世出の我が石井先生が心願を刻み込んでの作品であるから申分のあらふ管がない。之が廳でインラードされて等身大より稍大きい座像となるのである。

始め、ポーズに對して我々は何等具體的な意見を出さなかつた、略々位置だけを定めて全部先生に一任した。先生は四、五日間校長の日常座臥に同化し談笑の間にポーズを選定されたのが此の座像である。此の座像こそ校長の全面的な特徴を最もよく表現する形式であり又我々が二十數年來親しみ來つた校長本然の姿である。高い臺石の上に樹つて氣取つたスタイルであつたり、四方を睥睨するが如き態度こそ我が校長とは遙かに遠い存在である。普通の型を破り値か四、五日で愛のポーズを校長に結びつけた石井先生の非凡な爛眼に敬意を拂はざるを得ない。

二十八日には東京から石井師を招いて型を取り二十九日夜行で此の二箇の壽像は先生と共に東京のアトリエに移された。之から十ヶ月の後に完成すると云ふことである。二十七日には臺石を滋野、彌津、縣村方面に見に行かれた。山浦實科中等學校長の肝煎りでかなり有力な候補者があらはれたから不日御報告することが出来ると思ふ。壽像はかくの如く豫定通り着々進行して居ることを御報告して置く。

釀出金第二回納入報告 (六月三十日現在) (申込なく納金せる分は申込者の部にも記入す)

Table with 2 columns: Donor Name and Amount. Includes names like 井上 一郎 (500), 河合 英一 (500), 渡邊 亘 (500), etc.

Table with 2 columns: Donor Name and Amount. Includes names like 山本 友之 (500), 山本 友之 (500), 山本 友之 (500), etc.

Table with 2 columns: Donor Name and Amount. Includes names like 山本 友之 (500), 山本 友之 (500), 山本 友之 (500), etc.

Table with 2 columns: Donor Name and Amount. Includes names like 山本 友之 (500), 山本 友之 (500), 山本 友之 (500), etc.

合計金額 五千七百四十四円
合計人数 四百二十二名
累計金額 六千六百五拾圓也
三重支部會員の申込書は本稿締切後當係へ廻送されしため本稿へ掲載す
左記會員の申込高誤記に付き左の如く訂正す
二口 關本 芳雄 (蠶十六)

會費領收報告

昭和九年度通常會費納入者

- 松村 季美(蠶一) 佐谷戸健次郎(蠶一)
○工藤 正一(蠶一) 野澤 泰治(蠶一)
○松野 正一(蠶一) 小川 保(蠶一)
○小林 國造(蠶一) 黒江 文雄(蠶一)
○中澤 勝也(蠶三) 加藤喜一郎(蠶三)
○稻石 周藏(蠶三) 齋藤 格次(蠶三)
○木脇 寅三(蠶四) 中島静太郎(蠶四)
○廣井 俊一(蠶五) 片岡清治郎(蠶五)
○關田 九平(蠶五) 栗原 章(蠶五)
○白澤 幹(蠶五) 荒牧伊勢美(蠶五)
○長瀬 深見(蠶五) 齋藤繁太郎(蠶五)
○日比野 一夫(蠶五) 式田定千代(蠶五)
○弓田 弘(蠶五) 野本治兵衛(蠶五)
○萩原 孫三(蠶六) 野本治兵衛(蠶六)
○佐藤 俊三(蠶六) 糟谷遠三郎(蠶六)
○藤井 周藏(蠶六) 宇都宮休一(蠶六)
○船渡 勇平(蠶六) 猪坂 直一(蠶六)
○橋本 廣(蠶六) 大井 學(蠶六)
○小山 二郎(蠶六) 宇多田泰隆(蠶六)
○上林多兵衛(蠶七) 齋藤 舍(蠶七)
○鍵谷 傳(蠶七) 齋藤 舍(蠶七)
○森本爲之助(蠶七) 土岡 光郎(蠶七)
○橋本 武光(蠶七) 本谷 良雄(蠶七)
○窪田 祚作(蠶七) 勅使河原保(蠶七)
○小林 繁(蠶八) 高橋 汎一(蠶八)
○桑田 庄七(蠶八) 坂田 正登(蠶八)
○細川 護(蠶八) 石原 石司(蠶八)
○永田 平(蠶八) 根岸五之助(蠶八)
○齋藤 鳳一(蠶八) 榎野善之助(蠶八)
○小島 杉門(蠶八) 荻野 上風(蠶八)
○中島 文雄(蠶九) 金崎 眞英(蠶九)
○勝又 藤夫(蠶九) 佐藤 愛之(蠶九)
○佐藤 彰二(蠶九) 大高 雄三(蠶九)
○田口富五郎(蠶九) 門平潤一郎(蠶九)
○佐藤重太郎(蠶九) 四方 定雄(蠶九)
○鈴木 貞治(蠶九) 越智 岩平(蠶九)
○深谷 正一(蠶十) 山本三六郎(蠶十)
○尾藤 省三(蠶十) 米田 俊雄(蠶十)
○門田秀太郎(蠶十) 菅野 三郎(蠶十)
○宇田虎一郎(蠶十) 小中 潔(蠶十)
○萩原 幸胤(蠶十) 水城 孝男(蠶十)
○奥野 憲三(蠶十) 富田 治衛(蠶十)
○増田 孝(蠶十) 佐藤 義助(蠶十)
○佐藤雄次郎(蠶十) 中島 茂(蠶十)
○北原 正生(蠶十) 大谷内三衛(蠶十)
○丸山 十吉(蠶十) 谷川 海造(蠶十)
○柿田 寶作(蠶十) 中山 吉二(蠶十)

- 井上兵一(蠶十) 宮下 茂三(蠶十)
○安川 寛(蠶十) 若林 博(蠶十)
○新穂 利信(蠶十) 宮城 博(蠶十)
○大熊 康代(蠶十) 金子 幸一(蠶十)
○鈴木 泰市(蠶十) 野澤司馬作(蠶十)
○今村 良郷(蠶十) 原 茂(蠶十)
○三輪 貞徳(蠶十) 齋藤 孝道(蠶十)
○武本 本治(蠶十) 川合 清(蠶十)
○野口 勝也(蠶十) 内田訓之亮(蠶十)
○吉田 隆雄(蠶十) 加々井耕喜(蠶十)
○關 只(蠶十) 沼田 善吾(蠶十)
○山岸 武(蠶十) 竹内 善吾(蠶十)
○小山 哲夫(蠶十) 鈴木 英夫(蠶十)
○山崎 壽(蠶十) 大越 信(蠶十)
○松岡 潔(蠶十) 佐村 和夫(蠶十)
○宮崎 貞亮(蠶十) 平野 秀男(蠶十)
○櫻井 弘吉(蠶十) 西本 朝三(蠶十)
○山本友之(蠶十) 池田 善三(蠶十)
○片山 次夫(蠶十) 山本 誠(蠶十)
○森 晋(蠶十) 小林 重男(蠶十)
○小山 惠治(蠶十) 新井守之輔(蠶十)
○仲島 幸藏(蠶十) 兒玉 信章(蠶十)
○宮崎 秋雄(蠶十) 小林 一(蠶十)
○熊谷 恒次(蠶十) 井澤 喜三(蠶十)
○坂田 武(蠶十) 北澤 孝一(蠶十)
○竹内衛佐雄(蠶十) 岡崎 勸助(蠶十)
○中澤 二郎(蠶十) 松本 一(蠶十)
○向坂 朋二(蠶十) 内苑 駿吉(蠶十)
○茂山 孝保(蠶十) 關 順一(蠶十)
○北原 喜昌(蠶十) 宮城 俊雄(蠶十)
○森 亮平(蠶十) 野里 秀直(蠶十)
○西澤 節陸(蠶十) 田村 亮(蠶十)
○六川忠一郎(蠶十) 早乙女徳藏(蠶十)
○笠原 四郎(蠶十) 高瀬 毅一(蠶十)
○竹内 直人(蠶十) 細川 俊雄(蠶十)
○中村 吉男(蠶十) 上杉慶次郎(蠶十)
○村田 一由(蠶十) 永井 眞吉(蠶十)
○河淵 益美(蠶十) 山本 卯一(蠶十)
○古川 正喜(蠶十) 千村 敏三(蠶十)
○戸部 正久(蠶十) 細川 豊(蠶十)
○濱村 一彦(蠶十) 塚田 庸男(蠶十)
○竹内 博男(蠶十) 赤羽 是壽(蠶十)
○春日 卓郎(蠶十) 工藤 實司(蠶十)
○町野 巖(蠶十) 辻本 勇(蠶十)
○千吉 良幸(蠶十) 加藤 善三(蠶十)
○香掛 久雄(蠶十) 梶田 隆(蠶十)
○岡本 正男(蠶十) 齋藤 軍二(蠶十)
○山崎 信一(蠶十) 吉田 太郎(蠶十)
○山崎 勝巳(蠶十) 中島 眞(蠶十)
○藤森 明美(蠶十) 清水 眞(蠶十)
○原 治夫(蠶十) 宮入 保(蠶十)

- 遠山 正人(蠶十) 杉浦 卓三(蠶十)
○福地 進(蠶十) 齋藤 三郎(蠶十)
○村山 辰(蠶十) 清藤 文平(蠶十)
○土岐 宣治(蠶十) 遠藤 茂樹(蠶十)
○鈴木 誠一(蠶十) 小林 茂樹(蠶十)
○田中 三郎(蠶十) 酒井五三(蠶十)
○大箸 政平(蠶十) 父母 仙藏(蠶十)
○小坂田 亮(蠶十) 鈴木 孫司(蠶十)
○梅澤庫太郎(蠶十) 友重 誠三(蠶十)
○手塚 芳太郎(蠶十) 中村 吉男(蠶十)
○伊藤 清(蠶十) 久保秀次郎(蠶十)
○吉田 榮治(蠶十) 大久保秀次郎(蠶十)
○石川 健丸(蠶十) 佐藤 種雄(蠶十)
○岡村 源一(蠶十) 山口 貞周(蠶十)
○安井 義忠(蠶十) 原 英三(蠶十)
○市川 清男(蠶十) 馬場 遊龜(蠶十)
○池田忠次郎(蠶十) 石塚浪之助(蠶十)
○池原 保定(蠶十) 渡部 亘(蠶十)
○甲田 勝衛(蠶十) 高橋 安雄(蠶十)
○河井 正(蠶十) 三ヶ田良吉(蠶十)
○尾澤 謙朗(蠶十) 黒田誠一郎(蠶十)
○富田庄三郎(蠶十) 柳原 春彦(蠶十)
○小笠原憲代(蠶十) 西 孝重(蠶十)
○加藤 善一(蠶十) 藤原 四(蠶十)
○大谷 久(蠶十) 村山 晋(蠶十)
○湯澤 重敬(蠶十) 寺本 秀吉(蠶十)
○湯澤 雅天(蠶十) 島倉 督造(蠶十)
○小山 直助(蠶十) 倉橋 琢而(蠶十)
○塚田卯平太(蠶十) 倉橋 琢而(蠶十)
○新庄哲二郎(蠶十) 若林新一郎(蠶十)
○恒川 芳保(蠶十) 山田道男(蠶十)
○林 十郎(蠶十) 山本奈三郎(蠶十)
○柳澤 忠次(蠶十) 鹽田 健介(蠶十)
○牧野 弘(蠶十) 和田 晋(蠶十)
○岩田 正(蠶十) 多勢 龜次(蠶十)
○櫻井 卓三(蠶十) 若井 弘(蠶十)
○稻田 實(蠶十) 白井 要範(蠶十)
○梅澤治三郎(蠶十) 緒方 良純(蠶十)
○荒井 猛(蠶十) 木藤富士夫(蠶十)
○岩根 恒徳(蠶十) 村田 備宣(蠶十)
○鹽入 國治(蠶十) 山田 斧一(蠶十)
○手塚 政吾(蠶十) 彼末 武猪(蠶十)
○兒玉 來(蠶十) 相澤 仲司(蠶十)
○本橋万三郎(蠶十) 島山茂忠太(蠶十)
○南林 孝三(蠶十) 小平 光雄(蠶十)
○土岐 茂次(蠶十) 有松利一郎(蠶十)
○湯澤 康平(蠶十) 井上 保雄(蠶十)
○渡邊 正巳(蠶十) 小口 康雄(蠶十)
○笠原 五郎(蠶十) 宮城 長雄(蠶十)

- 佐藤 謙雄(蠶十) 田尻 恒次(蠶十)
○堀井金治郎(蠶十) 永山 平(蠶十)
○栗野 辰雄(蠶十) 齋藤 監(蠶十)
○三木 祖光(蠶十) 宮崎 連(蠶十)
○宇根山哲夫(蠶十) 佐藤 東平(蠶十)
○片倉 二郎(蠶十) 神崎 碩夫(蠶十)
○柳澤 榮一(蠶十) 安田 辰巳(蠶十)
○平山 俊夫(蠶十) 石井 公男(蠶十)
○山崎 道雄(蠶十) 藤野 誠一(蠶十)
○金子新一郎(蠶十) 望月 太(蠶十)
○小池 卓章(蠶十) 長谷川弘平(蠶十)
○高馬 一郎(蠶十) 飯倉 榮(蠶十)
○湯澤 文雄(蠶十) 飯倉 武(蠶十)
○中曾根 静三(蠶十) 馬場 正三(蠶十)
○鈴木 保男(蠶十) 大平 正三(蠶十)
○德永 忠祥(蠶十) 山口 保士(蠶十)
○野田 太郎(蠶十) 林 清市(蠶十)
○林 龜一(蠶十) 宮原 秀人(蠶十)
○井上 泰利(蠶十) 宮下 幸三(蠶十)
○鳥羽 誠(蠶十) 林 秀門(蠶十)
○井上 熊保(蠶十) 藤原 藤雄(蠶十)
○山崎 普榮(蠶十) 石井 清六(蠶十)
○山崎 精一(蠶十) 六川 忠行(蠶十)
○喜多尾猪門(蠶十) 平野 正夫(蠶十)
○水上 精一(蠶十) 忠行(蠶十)
○丸山 武(蠶十) 井内 英夫(蠶十)
○服部彌一郎(蠶十) 宮下文四郎(蠶十)
○矢島 文男(蠶十) 志賀 覺(蠶十)
○川村 五郎(蠶十) 長谷川恒三(蠶十)
○角田 勝郎(蠶十) 飯田 四郎(蠶十)
○杉本 政護(蠶十) 佐藤 一(蠶十)
○小林 良直(蠶十) 清水 保(蠶十)

- 伊藤友次郎(紡二) 河西 尚一(紡二)
○宮本 静雄(紡三) 林 太郎(紡三)
○櫻井 隆夫(紡四) 岡 豊治郎(紡五)
○藤井 義明(紡六) 本田 圭二(紡六)
○北原 基(紡八) 高坂 巖保(紡八)
○竹内 方榮(紡九) 山坂 求(紡九)
○四宮 太郎(紡十) 坂手 信男(紡十)
○武井 一郎(紡十) 小林忠十郎(紡十)
○松崎 武雄(紡十) 佐久間幸一(紡十)
○寺井 子藏(紡十) 北澤 琢郎(紡十)
○終身會費完納者
○酒井 末吉(蠶一) 皆川 二郎(蠶一)
○佐藤 國一(蠶一)
○入會金完納者
○優(蠶十一)
○昭九年度蠶絲學雜誌納入者
○皆川 二郎(蠶十一)
○皆川 二郎(蠶十一)

弔慰金報告

- 金式園也 香掛 文雄 春日 卓郎 平尾 孝平
○香掛 久雄 赤羽 是壽 枇杷木瀧雄
○金式園也 廣興 六川 忠一郎 池内 眞吾
○廣興 一省 堀田 正彦 小松野 均宅
○武田 好三 内藤 正久 小野寺 克史
○加藤 武 戸部 正久 小野寺 克史
○井澤 喜三 今井 鶴次 小野寺 克史
○金五拾錢 熊谷 恒次
○合計金參拾四圓也
○弔慰金は今月末迄受け付ます

養蠶科第二學年夏季校外實習所定地

Table with columns for location (e.g., 松本, 横関, 坂本), start date (e.g., 七月十五日), and other details for the silkworm rearing field practice.

